

## Scholes の音楽鑑賞教育観に関する一考察

— *The Listener's Guide to Music* (1919) の検討をとおして —

小林 美貴子

(本講座大学院博士課程前期在学)

### I はじめに

19世紀末に自動演奏ピアノや蓄音機が発明され、20世紀初期にはラジオ放送が開始された。これまで、音楽を聴くためにはコンサート会場に足を運ばなければならず、さらに演奏される楽曲は一度しか聴くことができなかった。しかし、自動演奏ピアノや蓄音機が開発されたことによって、楽曲の演奏を何度も繰り返し聴くことが可能になった。このようなメディアの発達は、学校音楽教育において音楽鑑賞教育が盛んになったことにつながる。

20世紀初期のアメリカの音楽鑑賞教育に関する先行研究は多々見られるが、同時期のイギリスの音楽鑑賞教育に関する先行研究は、ほとんど見られない。20世紀初期に MacPherson などが音楽鑑賞教育に関する書籍を出版したことや、蓄音機で有名なグラモフォン社や自動演奏ピアノで有名なエオリアン社、イギリス放送協会 (British Broadcasting Corporation, 以下 BBC) などとも結びついている Scholes がこれらに関連した音楽鑑賞教育の指導法を提案したこと、1924年以後 BBC による学校音楽放送が始まったことから、1920年代にはイギリスにおいても音楽鑑賞教育が盛んになったといえる。

20世紀初期のイギリスの音楽教育に関する先行研究には以下のものがある。Cox (1993)<sup>1)</sup> は、Hullah, Stainer, McNaught, Sharp, Somervell などの勅任視学官 (Her/His Majesty's Inspectorate of Schools<sup>2)</sup>) の働きや、1901年から1928年までの学校のカリキュラムにおける音楽の発展に着目しながら、1872年から1928年までのイギリスの音楽教育史について述べている。また Cox (2002)<sup>3)</sup> では、1923年から1999年までのイギリスにおける教育論争、12歳以下の年齢における音楽教育、1924年から1972年までの BBC の学校音楽放送についてまとめている。Pitts (2000)<sup>4)</sup> は、イギリスの中等教育 Secondary School における音楽教育の1世紀間の変遷について、音楽教育史上重要な時代ごと (主に10年ごと) に区分して論じている。

音楽鑑賞教育に関する先行研究としては、Moutrie (1981)<sup>5)</sup> が挙げられる。Moutrie は、20世紀初期のイギリスの音楽鑑賞教育に関わった MacPherson, Read, Scholes の3人について述べている。しかし、この先行研究では、Scholes の出版物の内容に関する記述はあるが、彼ら3人の人物紹介にすぎず、具体的な指導法や当時のイギリスの音楽鑑賞教育の特徴は明らかにされていない。

本研究では、Moutrie が挙げているイギリスの音楽鑑賞教育に関わったとされる3人のなかでも Scholes に着目する。Scholes はオルガニスト、学校教師、音楽報道記者、音楽講演者、そして音楽番組の音楽評論家でもあった。本研究では、Scholes の書いた *The Listener's Guide to Music* (1919)<sup>6)</sup> を検討し、Scholes の音楽鑑賞教育観の一指針をとらえることを目的とする。

### II *The Listener's Guide to Music* の概要

- まず、コンサートを聴きに行くような音楽愛好家に関して、Scholes は次のように述べている<sup>7)</sup>。
- ・人々がコンサートを聴きに行っても、聴衆の半分の人しか音楽を理解できていない。
  - ・本や講演、劇であれば、分かりやすい言葉でできているため、人々は理解することができるようだが、交響曲やピアノ協奏曲などはあいまいなものであるため、理解しがたい。
  - ・理解できている聴衆にはあるが、理解できていない聴衆にはない知識は何か。また、交響曲やピアノ協奏曲などの曲には決まった順序が存在するようである。理解できている聴衆はその決まり

を理解しているに違いない。それは何か。

以上のことを考慮しながら、Scholesはこの本をコンサートによく行く人 (concert-goer), すなわち音楽愛好家を対象とし、聴取する際に必要な知識を与えようとした。さらに、この本を書いた背景には、当時出版されていた音楽鑑賞に関する書物への批判も存在する。

「音楽鑑賞に関する本は、コンサートへよく行く一般の人にとっては長すぎたり難しすぎたりするものであった。さらに、そのような本は多くの読者を得るといよりも、自身の主張を表すものであった。」<sup>8)</sup> 「聴取者にとって役に立たない音楽の知識はたくさんあり、『音楽の要素 (The Elements of Music)』と題されたような書物を読んだとしても、記譜法について少し学んだだけで、音楽を構成する要素に関する知識はほとんど学べていない。」<sup>9)</sup>

このように、当時の音楽鑑賞に関する書物は一般の人には難しく実際に聴取を行う際に役に立たないと指摘した上で、Scholesはこの本を書くことによって、できるだけ簡潔に分かりやすい方法を用い、音楽を専門的に学んでいるわけではないがコンサートによく行くような一般の人を聴取へと導く手段を与えようとした。また、楽器を習っているような音楽を専門的に学習している人にとっても、より深い学習へと導く手がかりとなることが期待される。さらに、当時の学校での音楽の授業において徐々に広まりつつあった「音楽鑑賞」においても用いられうるものでもあった。

### Ⅲ The Listener's Guide to Musicの内容

本書の目次は、右に示したとおりである。1章ではこの本の目的および意図、2章では楽語などの音楽の説明をする上で欠かせない基本的な事項の説明、

3章では前述した指摘や、Scholesの考える聴取に必要なことが書かれている。4章から11章まではソナタ形式やフーガなど楽曲の形式(成り立ち)に関すること、オペラや標題音楽といったジャンルに関することが主に書かれている。12章および13章では楽器および楽器編成に関すること、14章では作曲家に関すること、付録では学校の音楽の授業への応用法が書かれている。本章ではこれらを(1)基本的な知識、聴取に必要なこと、(2)楽曲の形式やジャンル、(3)楽器、(4)作曲家、(5)授業への応用、の5つに分けて内容を概観していく。

<目次>

- 1章. ガイドの必要性
  - 2章. わかりやすく必要な専門用語の説明
  - 3章. 聴取者が本当に知っておかなければならないこと
  - 4章. 作曲者はどのように作っているのか
  - 5章. 音楽の構造原理について
  - 6章. どのように作品が構成されているか
  - 7章. 「ソナタ形式」について
  - 8章. 1つのまとまったものとしてのソナタと交響曲
  - 9章. 「山のようなフーガ (Mountainous Fugues)」とはどういう意味ですか?
  - 10章. 「標題音楽」について
  - 11章. 歌曲、オラトリオ、オペラについて
  - 12章. オーケストラおよび楽器
  - 13章. 典型的な楽器編成
  - 14章. 作曲家のつながり
- 付録: 本書を授業で使用するためのヒント  
用語解説、索引

(1) 基本的な知識、聴取に必要なこと (1章~3章)

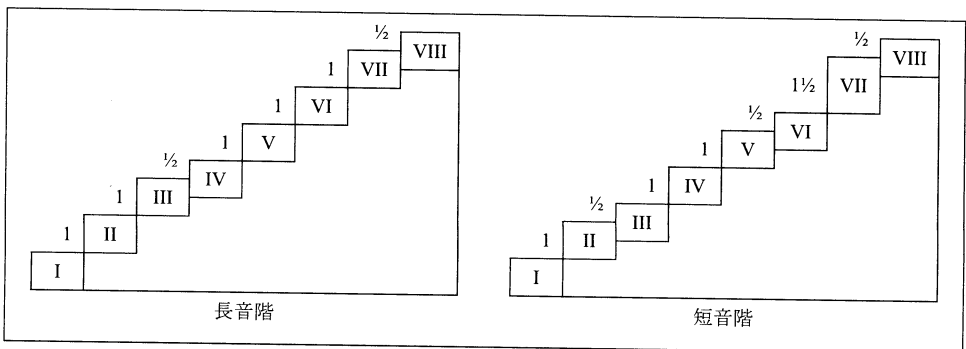


図1 長音階と短音階 (図中の1は全音, 1/2は半音を意味する。)

\* The Listener's Guide to Music, p.5 より筆者作成。

Scholes は、音楽を学習する上では欠くことのできない楽譜に関する知識が聴取者には必要であると考えた。音（歌）の説明から始まり、音階と調、転調の説明が続く。音（歌）の項目では、鳥と人間のみが歌を扱える動物であることが記されている。音階と調の項目では、長音階と短音階を図1のように階段状に表すとともに、短音階の VI および VII の音は変化することがあるとも注記している。また、長音階と短音階の違いは半音の位置であることを示し、音名（A, B, C, D, E, F, G）、シャープおよびフラット、「C major」はC音から始まる長音階であることも説明している。転調の項目では、1曲がたいてい1つの調でできていること、曲の中で関係調に転調することが記されている。

リズムや拍子の項目では、すべてのものがリズムで動いていることや、音楽とともに詩を例に挙げながら、拍（強拍）、拍子、拍子記号について簡潔に述べられている。また、音楽のリズムは小楽節や大楽節にも関わることが記されている。“God save the King（英国国歌）”の旋律に着目し、拍子記号および楽節について説明されている。旋律、和音、対位法の項目では、旋律と和音の違いやコード、対位法と和音の違いなどが“God save the King”を用いて説明されている。形式の項目は後の章で十分に説明されるとし、作品番号の項目では Opus という言葉の意味が説明されている。

このような音楽の基本的な事項を学習した上で、3章では音楽の形式（成り立ち）、楽曲や作曲家の歴史、楽器および楽器編成の3つが聴取者に必要な知識であると Scholes は述べており、この3つを知ることによって、聴取する楽曲がどのようにできているかが分かるとも考えている。聴取者に形式に関する知識があれば、すなわち曲の中にある主題が存在することを知れば、曲の繋がり方や構成を把握するのに役立つと考えている。聴取する音楽作品が作られた時代について知ること、すなわち音楽史のなかで作曲家や楽派、その作曲家が生きた時代がどのように位置づけられているかを知ることが、聴取の際に役に立つと考えている。さらに、オーケストラの作品においてさまざまな楽器の音色を識別することで、聴取者に聴取への新しい関心を与えるだろう、とも述べている<sup>10)</sup>。

## (2) 楽曲の形式やジャンル（4章～11章）

作曲家は自分の感情や思考を単に曲という形で表しているのではないことや、音楽は人間の感情などの表現でもあるが自由なものではなく規則にしたがって構成されていること、どの作曲家も他の作曲家の優れた作品を勉強しながら有効な作曲の原理を把握しようと努力してきたことを Scholes は説明している。

曲の成り立ちに関して、まず読者に3つの旋律（順に I, II, III）を考えさせ、それを「I II I III I」や「I II I III I II I」の順に並べることで、メヌエットやロンド形式などの構成を説明している。読者自身が考えた3つの旋律を並べた曲に対し、その3つの旋律がどれも同じ調であったり、どれも似たようなリズムであったり、もしくはそれぞれがかなり離れた調であったりリズムであったりすることで不満を感じるかもしれないが、反復を用いることで正しい原則を把握している、と Scholes は述べている<sup>11)</sup>。

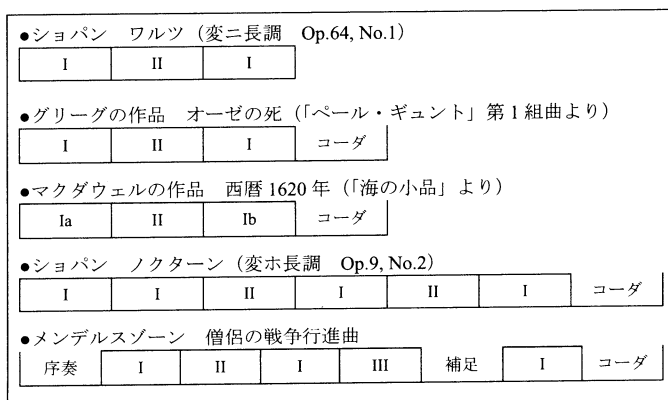


図2 小曲の構成

\*The Listener's Guide to Music, pp.29-31 より筆者作成。

続いて、短い作品の成り立ちを説明している。読者に考えさせた旋律と同様に、作品に出てくる主題を登場する順に I, II, III と置き、曲の構成を図2のように表しながら説明している。また、ヘンデルの「アリアとヴァリエーション」では、「調子の良い鍛冶屋」を例に挙げ、主題が第1から第5ヴァリエーションの間でどのように変奏されていくかを述べている。主に拍子やリズムの違いに関して説明されている。また、「アリアとヴァリエーション」は何世紀にもわたって人気のある形式であること、エリザベス朝時代に作られたことなども説明されている。「2部形式」の説明を経て、次はソナタ形式の学習にうつる。

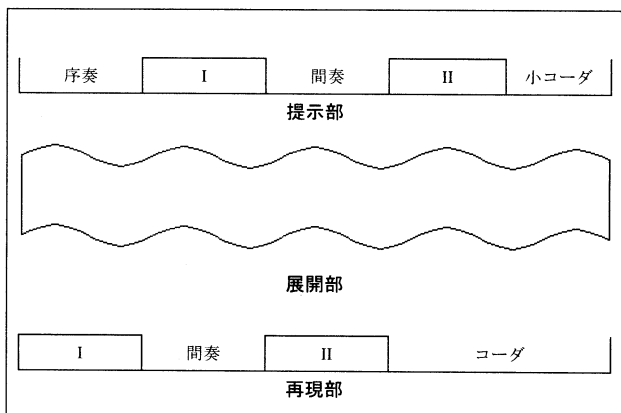


図3 序曲の成り立ち

\*The Listener's Guide to Music, p.37 より筆者訳出。

ソナタ形式に関しては、まず図3のような形で序曲の構成を学ばせる。続いてベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」を主題および小節数で細かく分け、さらに調にも着目しながら楽曲の説明を行っている。

以上の内容を理解した後は、交響曲、あるいはソナタについて学ぶよう設定されている。交響曲もソナタも3つ、あるいは4つの曲が繋がったものであることを述べている。ソナタの例としてベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」、「月光」、「葬送行進曲つき」の3つを挙げ、交響曲の例としてベートーヴェンの交響曲「英雄」、エルガーの交響曲変イ長調

を挙げており、それぞれの楽章ごとに形式やどのような曲であるかの説明が記されている。

フーガに関しては、フーガという言葉の説明がされており、続いてどのように構成されているかを図で説明している。その他に標題音楽、歌曲、オラトリオやオペラといったものも挙げられ、それぞれ説明されている。

### (3) 楽器に関して (12章および13章)

弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器、ハーブという5つの項目に分けて各楽器の説明がされており、楽器編成に関しては、18世紀後期、19世紀初期、20世紀初期の典型的な編成が例として挙げられている。

### (4) 作曲家 (14章)

16世紀から20世紀初期に至るまでの重要な作曲家たちを、初期の対位法、初期の和声派 (Harmonic School)、後期の対位法派、ソナタと交響曲の時代、初期ロマン派、中期ロマン派、後期ロマン派、そして現在 (20世紀初期) の8つに分け、時代を追いながら説明している。

### (5) 授業への応用 (付録)

「この本を授業で使う際に、ここで挙げるわずかなヒントは歓迎されるだろう<sup>12)</sup>、と Scholes は述べている。「一般的なヒント」では、授業で取り扱う際に必要な事項を3つ挙げている。「個々の章の取り扱いに関するヒント」では、この本の1章から14章までの指導内容について述べられている。生徒に何を理解できるようになってほしいのかを明示している。また、「自動演奏ピアノと蓄音機」ではそれらに関する事項が書かれている。最後に、3~4冊の最も役立つと考えられる参考資料が掲載されている。この内容をまとめたものを表1に示す。

表1から、授業に応用する際にはただ読むだけでなく実演する内容が大幅に増えている。教師自身の演奏および即興だけでなく、可能な限り生徒に演奏させる項目が多々あった。また、自分で作曲家の生涯や活躍などを調べさせることや、話し合いの場面も何度か想定されていることから、より深く楽曲や作曲家に関する知識をクラス全員で共有し、深めようという姿勢が見られる。

ここで、本文で聴取者に必要とされていた①音楽の形式、②作曲家の歴史、③楽器編成に注目する。形式に関しては、実際に生徒に演奏させ、さらに主題がいつ出てきたか、調の変わり目はどこか、などの質問をとおして楽曲の構造を把握させようと考えたことが分かる。作曲家の歴史に関しては、4章において生徒に調べさせたり、話し合いをさせたり、教師が楽曲を取り上げる際に少しその作曲家の解説を加えるなどすることで学ぶようになっている。楽器編成に関しては特に触れられていない。音楽を聴く手段である自動演奏ピアノと蓄音機の2つを取り上げ、説明されていた。

表1 付録：本書を授業で使用する際のヒント

一般的なヒント		
1. 可能な限りクラスの人数を集めなさい。短い資料を用意させ、それを読ませ、その資料を討論のテーマにしなさい。 2. 事例となる音楽を可能な限り使いなさい。その音楽をクラスの生徒自身でも演奏させなさい。 3. あなたが最初に行うことは耳を訓練することである、ということ覚えておきなさい。		
個々の章の取り扱いに関するヒント		
章	タイトル	内容
1	ガイドの必要性	(生徒と)一緒に読みなさい。もし可能ならば話し合いなさい。
2	わかりやすく必要な専門用語の説明	<p>&lt;音階&gt;                      長音階と短音階を演奏しなさい。さらに内容を深めたいのであれば、全音階や古代の「モード」も説明し、演奏しなさい。これらの音階を、生徒たちに聞いて識別するように指導しなさい。</p> <p>&lt;調&gt;                      簡単な讃美歌の旋律やフォークソングを演奏し、いつ調が変わるか、長調であるか短調であるか、など生徒があなたに伝えるよう頼みなさい。その作品の主調がいつ再び現れるかを生徒たちが認識できているかどうか確認しなさい。</p> <p>&lt;リズムと拍子&gt;                      旋律の一部を演奏し、それが2拍子であるか3拍子であるか、生徒たちに言わせなさい。また、短い旋律を演奏し、小楽節と大楽節を識別するように指導しなさい。</p> <p>&lt;和音&gt;                      もしもあなたが望むのであれば、さまざまなカデンツ（「用語解説」参照）を説明し、演奏しなさい。また、生徒たちに各カデンツに名前をつけさせなさい。より近代的な和音を例示するために、ベートーヴェンあるいはヴァーグナーの楽曲の一部を演奏し、さらに、より単純な和音を示すためにハイドンおよびモーツァルトの楽曲の一部と比較しなさい。対位法の特徴を例示するために、バッハの楽曲の一部を演奏しなさい。</p>
3	聴取者が本当に知っておかなければならないこと	読みなさい。
4	作曲者はどのように作っているのか	読み、十分に話し合いなさい。作曲家に関することを生徒たちに調べさせ、その作曲家の作品の特徴に関する短い記述をもってこさせなさい。
5	音楽の構造原理について	作曲するにあたって不可能なやり方と可能なやり方を例示しながら、もし可能ならばピアノを即興で弾きなさい。もしくは生徒に同じことをさせなさい。
6	どのように作品が構成されているか	もし可能ならば、この本で提示した作品、あるいは他の短い作品を演奏したり生徒に演奏させたりしながら、この章の授業は何回か行いなさい。演奏された音楽を耳で分析するよう生徒たちを訓練しなさい。まず主となる分割を認識し、次に主題の扱い方の詳細を見抜くよう学習させなさい。このことを行うと同時に、2章で行った活動を復習する機会を作りなさい。この過程は、今ごろまでには、生徒たちに徹底的に興味をもたせるようになるべきであったのに。
7	「ソナタ形式」について	扱いは6章の場合と同様である。「悲愴」ソナタなどの第1楽章を演奏しなさい。ハイドンとベートーヴェンの交響曲（ピアノ2重奏版）やベートーヴェンの序曲などから、生徒にソナタ形式の楽章を演奏させなさい。ハイドンやベートーヴェンなどについて感想を交えなさい。また、生徒に作曲家に関する短い話を書いたり読ませたりしなさい。このようにさまざまなことを紹介しなさい。そしてテーマが何回ものクラスでの話し合いになるようにしなさい。耳で分析する訓練を続けなさい。もし読み取ることができるならば、楽譜からいくつかの楽章を目で分析させなさい—しかしこれはあまり重要ではない。
8	1つのまとまったものとしてのソナタと交響曲	前章と同様に扱いなさい。もし可能であれば、エルガーの交響曲第1番のピアノ独奏も含めなさい（これはピアノ・ロールの形でも得られうる）。
9	「「山のようなフーガ（Mountainous Fugues）」とはどういう意味ですか？」	バッハの48のプレリュードとフーガのうちのいくつかを演奏しながら、同様に扱いなさい。バッハの生涯と業績の重要性を教えることに授業を費やしなさい。

10	「標題音楽」について	一省略—このテーマの取り扱いは多様であり、終わりはない。
11	歌曲、オラトリオ、オペラについて	違いを示すために、ヘンデルとエルガーのオラトリオから抜粋して演奏しなさい。また、モーツァルトとヴァーグナーのオペラも同様に。
12	オーケストラおよび楽器	このテーマを生かす最良の方法は、独奏楽器およびさまざまな楽器の組み合わせの違いに注意しながら、(a) 生徒たちをオーケストラの演奏を聞きに連れていくこと、(b) オーケストラのレコードを流すことである。
13	典型的な楽器編成	
自動演奏ピアノと蓄音機		
この本の各章の実例に適したピアノ・ロールおよびグラモフォン・レコードのリストを加える予定であったが、メーカーのカatalogが今や流出しているので、どんな読者も自分が惹かれると同時に、この本と結びつく曲を、自分自身で簡単に選ぶことができる。この本で触れられているほとんどすべての作品はピアノで、多くの曲はグラモフォンで聴くことができる。グラモフォン・レコードのいくつかは作品を短縮したもの、すなわち「形式」に影響を与えているものである、ということをおぼえておきなさい。いくつかのイギリスの音楽も含めなさい。H.M.V.もコロムビア社も、オーケストラの個々の楽器の音を例示するグラモフォン・レコードを出版している、ということに注意しなさい。		

\*The Listener's Guide to Music, pp.85-88 より筆者作成。

#### IV 考察

これまでの概観をとおして、音楽鑑賞を行うために Scholes が必要であると考えていたことを考察する。

この本の目的は、コンサートによく行く音楽愛好者であるが音楽を理解できていない人を、できるだけ簡潔に分かりやすく聴取へ導く手段を与えることであった。聴取者が理解できていないことは、交響曲やピアノ協奏曲などの曲に存在する決まった順序、すなわち楽曲の構造（音楽の形式）である、と Scholes は考えたと推察される。

この本ではまず音符、音階と調、転調、リズムや拍子、旋律、和音、対位法、作品番号（Opus という言葉の意味）など、音楽を学習する上では欠くことのできない楽譜に関する事項が説明されていた。これらは音楽の基盤であり、授業への応用の際には音階の実演を用いるなどさらに詳しく学習するよう意図されていた。さらに、この2章の内容はここだけの学習におさまらず、6章などで復習されることから、特に授業への応用の際には重視されている部分であったといえる。

次に、聴取者に必要な知識として提示された①音楽の形式、②作曲家の歴史、③楽器編成、の3つに注目する。

形式に関する項目が目次の大半を占めていること、 Rond 形式の説明から始まり、小曲の構成を図示しながら丁寧に説明されていることから、Scholes は特に音楽の形式を読者に伝えようとい意図していることが明らかである。小曲の構成図に関しては、初めは3部形式、次はそれにコーダがつき、その次はIが最初と終わりでは少し違うもの、と徐々に複雑なものになっていく。これは、単に音楽を聴いて楽しむのではなく、図で示されていたようにその曲のなかで主題がどのように出てくるか、序奏またはコーダがあるのか、などその曲の形式についての知識を深めることにつながるだろう。

また Scholes は、音楽作品には一定の主題（テーマ）があるということが分かれば曲のなかに現れる主題を確認し、その扱いに気づくことができる、すなわち楽曲の構造を理解することができる、と考えていた。また、このことが可能になれば、聴取の際に主題を意識することによって作品に対する認識が変わり、誰もが曲を鑑賞することができるようになる、と述べている<sup>13)</sup>。

形式の登場する順番についてみると、フーガが最後に出てきたことから、ここで述べられている形式は、時代に沿って配列されたものではないと考えられる。フーガは対位法にも関わるものであり、各主題の位置を追っていく3部形式やソナタ形式とは異なっているため、あえて最後に位置づけられたのではないだろう。

作曲家の歴史に関しては、著名な作曲家およびその当時の技法（例えば16世紀であればモードを用いるなど）、流行したジャンルに関する事項などが音楽史の流れに沿って並べられていた。

楽器編成に関しては、各楽器の説明や構造が簡潔に記述されていたり、楽器の写真に合わせて掲載することで、より楽器に親しみをもたせたりすることができると考えられる。また、1世紀ごとの楽器編成の移り変わりを示しており、18世紀後期から楽器が充実していく過程を、少しではあるが見ることができ

る。以上のことから、この本をととして、Scholes は、聴取者に対し単に楽譜に関する知識を与えるだけでなく、楽曲の内容をより理解するために必要な知識を簡潔に分かりやすく説明したことが確認できた。彼が音楽鑑賞に必要であると考えたことは、①音楽の形式、②作曲家の歴史、③楽器編成、の3つであった。そのなかでも Scholes が強調したことやこの本の大半を占めていたことから、①音楽の形式が特に重視されていたことが明らかになった。Scholes は、曲のなかに主題がどう現れるかを意識することこそが、真の鑑賞へとつながると考えたのである。

## V おわりに

今回は Scholes の一般の人に向けて書かれた本を検討することで、音楽を理解するための手がかりが音楽の形式、すなわち楽曲の構造について理解することである、と彼が考えていたことが明らかになった。このことは彼の他の著作において形式を理解することに関する記述が多くあること、また詳細に述べられていたことから明らかである。

今後は他の書籍も検討することによって、さまざまな視点から Scholes の音楽鑑賞教育観を考察していく必要がある。さらに、Scholes だけでなく MacPherson など音楽鑑賞教育に関わった人物の書物も検討し、20世紀初期のイギリスの音楽鑑賞教育の動向を探ることを今後の課題とする。

## 注

- 1) Cox, G., *A History of Music Education in England 1872-1928*, Ashgate, 1993.
- 2) 学校を訪問することはもちろん、視察業務を決められた時間に行い、教育の動向を検討し、教育方針の効果を評価し、視察から得た問題を解析する役職。
- 3) Cox, G., *Living Music in Schools 1923-1999: Studies in the History of Music Education in England*, Ashgate, 2002.
- 4) Pitts, S., *A Century of Change in Music Education: Historical Perspectives on Contemporary Practice in British Secondary School Music*, Ashgate, 2000.
- 5) Moutrie, J., "The Appreciation Movement in Britain: MacPherson, Read and Scholes", Simpson, K.(Ed.), *Some Great Music Educators*, Novello, 1981, pp.60-69.
- 6) Scholes, P. A., *The Listener's Guide to Music*, Hazell, Waston & Viney, 1919.
- 7) Ibid., pp.1-2.
- 8) Ibid., p.2.
- 9) Ibid., p.11.
- 10) Ibid., pp.11-13.
- 11) Ibid., p.27.
- 12) Ibid., p.85.
- 13) Ibid., p.12.

## 参考文献

- ・Cox, G., *A History of Music Education in England 1872-1928*, Ashgate, 1993.
- ・Cox, G., *Living Music in Schools 1923-1999: Studies in The History of Music Education in England*, Ashgate, 2002.
- ・藤井泰「両大戦間イギリスの中等教育改革構想－『ハドウ報告書』(1926)を中心として－」『松山商大論集』第34巻第2号, 1983, pp.95-121。
- ・藤井泰「イギリス労働党の中等教育政策に関する一考察－『すべての者に中等教育を』(1922)を中心として－」『松山大学論集』第1巻第2号, 1989, pp.217-250。
- ・藤井泰「イギリスにおける中等学校制度の成立過程－教育院『中等学校規則』(1904年)を中心として－」『松山大学論集』第6巻第3号, 1994, pp.301-317。
- ・岩村清太『西洋教育史』池上書店, 1983, pp.42-74。
- ・岩下誠「近代イギリス民衆教育史における日曜学校研究の意義と課題」『東京大学大学院教育学研究科

- 教育学研究室 研究室紀要』第 33 号, 2007, pp.123-130。
- 川原浩『西洋音楽教育史—主としてイギリスの民衆音楽教育—』広島大学出版研究会, 1976。
  - Long, N., *Music in Education : Grammar School, University and Conservatoire*, Faber, 1959.
  - MacPherson, S., *Music and its Appreciation, or the Foundations of True Listening*, Joseph Williams, 1910.
  - MacPherson, S. and Read, E., *Aural Culture Based upon Musical Appreciation*, Joseph Williams (筆者が所蔵しているものには出版年が明記されていない) .
  - MacPherson, S., *The Musical Education of the Child: Some Thoughts and Suggestions for Teachers, Parents and Schools*, Joseph Williams, 1915.
  - マクファースン／高橋均訳『器楽鑑賞の基礎』共益商社書店, 1936。
  - 真篠将『世界の音楽教育めぐり』明治図書, 1974, pp.19-38。
  - Moutrie, J., “The Appreciation Movement in Britain: MacPherson, Read and Scholes”, Simpson, K. (Ed.), *Some Great Music Educators*, Novello, 1981.
  - 坂本真由美「イギリスの学校評価における教職員団体の役割」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 3 号, 2000, pp.151-162。
  - Scholes, P. A., *Learning to Listen by Means of the Gramophone*, Gramophone, 1921.
  - Scholes, P. A., *Everybody's Guide to Radio Music*, Oxford University Press, 1926.
  - 荘司雅子編『現代西洋教育史』亜紀書房, 1969。
  - 鈴木俊之「多元的社会における宗教教育—イギリスを事例に—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 48 号, 2002, pp.84-94。
  - Pitts, S., *A Century of Change in Music Education: Historical Perspectives on Contemporary Practice in British Secondary School Music*, Ashgate, 2000.
  - 高妻紳二郎「イギリス教育行政における新学校査察システム導入の影響と課題—1992 年教育法制定以降の今日的動向をめぐって—」『宮崎女子短期大学紀要』第 22 号, 1996, pp.23-35。
  - 高妻紳二郎「イギリス初期視学制度の機能と性格～勅任視学官の教育活動に関する事例分析（1839—62 年）～」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 19 号, 2001, pp.75-100。
  - 田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社, 1975。
  - 高萩保治『音楽鑑賞教育法』音楽之友社, 1974。
  - 高萩保治『音楽教育の国際化—比較研究からのアプローチ—』音楽之友社, 1995。